

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、5 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立白鷗高等学校附属中学校

問題は次のページからです。

1

次の文章1と文章2を読んで、あとの問題に答えなさい。

(*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。)

文章1

桜の咲く時期になると、必ず思い出す歌がいくつかある。ソメイヨシノの並木の花がいつせいに満開になって、咲いてるなあ、と首を空に向けてながら思い出すのは、次の歌である。

桜はないのち一ぱいに咲くからに生命をかけてわが眺めたり

岡本かの子

そして桜満開の夜となれば、この歌。

清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

与謝野晶子

桜の咲くころの祇園を訪ねたことはないのだが、脳内には花灯りの下を、浮かれたような、ほろ酔いのような表情を浮かべて道を歩く人々の、うつくしい顔がくつきりと浮かぶ。夜桜見物を一度だけしたことがあるが、結構寒くて、じっと座っているとガタガタ震えてくるし鼻水は出るし、思うほどロマンチックではない。けれども人をうつくしいと思ふ気持ちは、この歌を胸に抱いていたため失わずにすんだ。

先ほどのかの子の歌が桜の花と自分を同一化させて自分を主人公として短歌の額縁の真中におさめたのに対し、この晶子の歌は、あくまでも自分はレンズとしての存在で、きれいな夜桜のある風景をまるごと愛でている。きれいな花が咲いたらそれだけを見るのではなく、そこにある気配までも感知する晶子の懐の深さに感じている。

「こよひ逢ふ人みなうつくしき」は、桜の咲いている時期以外でも、いろいろな場所にあてはめることができる。気後れしがちなパーティーなどでも「こよひ逢ふ人みなうつくしき」の言葉を唱えながら現地向かえば、自ずと前向きになり、好意的に人と会える気持ちになれて勇気がわくのである。

自分の気に入った詩の言葉を心の中でつぶやく行為は、願いをかなえるために呪文を唱えることにとっても似ている。短歌を知る、覚えていくということは、自分の気持ちを保つための言葉を確保していくことでもあるのだと思う。

てのひらをくぼめて待てば青空の見えぬ傷より花こぼれ来る

大西氏子

この短歌を胸に抱いてつくづく思うのは、さびしいのは自分だけではない、ということ。桜のはなびらがはらはらと散っていく様子を見ると、なんともいえず切ない気持ちになる。この歌ではそれが「青空の見えぬ傷」よりこぼれてきたものだというのである。あのきれいな青い空

にも傷がある。自分の中の見えない場所にあるもののように。そんなことを考えている孤独こどくな一人の女性を思うと、桜も青空もそれを受け止めようとしている人も、それを遠くで思う人（読者）も、すべてが無限の切なさに覆おほわれているように感じられてくる。こんなにおおらかに「傷」を言葉にできるとは。ほんとうにさびしいときに、この歌を唱えつづけると、いつの間にかうれしい気持ちに変わっていくような気がする。

（東直子ひがし なおこ「生きていくための呪文じゆもん」による）

〔注〕

歌——短歌。

咲くからに——咲いているから。

わが眺ながめたり——私は（その桜の花を）ながめるのだ。

岡本かの子おかもとのかのこ——大正、昭和時代の小説家、歌人。

清水しみず——京都きょうとの清水寺しみずでら。

祇園ぎわん——京都きょうとの祇園神社ぎわんじんじや。

こよひ——今夜。

与謝野晶子よせのあきこ——明治、大正時代の歌人。

花灯りはなあか——桜の花が満開で、その辺りのやみが

ほのかに明るく感じられること。

ほろ酔よいのような表情へいしやうを浮かべて——うっとりした顔つきで。

愛めでている——味わい楽しんでいる。

大西民子おおにしのみこ——昭和時代の歌人。

文章2

次の文章は、江戸時代に俳諧と呼ばれていた俳句について、当時活やくしていた松尾芭蕉が述べた言葉を説明したものです。

謂応せて何か有。

江戸の其角が、「下臥につかみ分ばやいとぎくら」という巴風（其角の門人）の句を知らせてきたが、「どうおもつかね」と芭蕉がたずねられた。去来は、「枝垂桜（系桜）のようすをうまく言い表しているではありませんか」と応じました。一句は、みごとに咲いた系桜の下に臥せて、花の枝をつかんでたぐってみたい、といった意味です。そこで言った芭蕉の返答がこれです。物のすがたを表現し尽くしたからといって（「いいおおせて」、それがどうしたのだという批判です。ことばの裏側に、「余韻」とか「想像力」といった考えを置いてはどうでしょう。俳句にかぎらず、詩という文芸は、表面的な理解だけでわかった気になってはつきりません。

舌頭に千転せよ。

これは去来の苦い経験に発することばのようです。「有明の花に乗り込む」とははじめの五・七をよんで、最後をどうするか悩んだことがあ

りました。馬をよみ込みたかったものの、「月毛馬」「葦毛馬」と置いたり、あいだに「の」を入れたりしてみても、どうもうまくいかない。ところが友人許六（前に登場した、芭蕉の画の師になった弟子）の、「卯の花に月毛の馬のよ明かな」を目にして、なるほどどうなった、この手があったのかと。許六は中の七文字に馬を置いて、すらりとよんだところ、去来はこだわって五・七を動かそうとせず、どうしてもうまくいかなかったのです。常々芭蕉が、「口のなかで千回でも唱えてみよ」とおっしゃっていたのはこのことだったのだ。ほんのわずかの工夫でうまくいく。そこに気づくまで、「千転せよ」というわけです。去来の句は結局完成しなかったのでしょうか。

不易流行。

たいへん有名なことばですが、はたして芭蕉がそのまま口にしたかどうか、よくわかりません。でも、一門のあいだではいろいろと議論があったと、去来は言っています。「不易」とは永久に変わらないこと、「流行」とはつねに変化すること、「不易流行」というのは、まったく正反対のことを一語にまとめたこととなります。諸説紛々だといいつつ、去来は、「不易流行の教えは、俳諧不変の本質と、状況ごとの変化」という二面性を有するものだ」というのです。一貫性と流動性の同居、これが俳諧というものだということでしょうか。

『三冊子』でも、「不易流行」に言及しています。ここでは、「師の風雅に、万代不易あり、一時の変化あり。この二つに究り、その本一なり」と、根本は同一だと説いています。そこで、つぎに土芳の『三冊子』をみてみましょう。

土芳は、伊賀上野藩士、一六五七年生まれ、一七三〇年没。姓は服部氏。若いころから芭蕉を慕い、伊賀の俳諧を盛り上げた人物です。『三冊子』は、芭蕉晩年の教えを書きとどめた書で、出版はずっと遅れるものの、多くのひとに筆写されて早くから広まりました。「白双紙」「赤双紙」「わすれ水」の三部をまとめて、『三冊子』として知られています。

高く心を悟りて、俗に帰るべし。

俳句をよむ精神は目標を高くもって、同時に日々の生活にいつも目を向けるように心がけなさい、という教えです。むかしのひとの作品や精神をしつかり学ぶとともに、生活する人びとの気持ちになってこそ、すばらしい俳句が生まれるのだというのです。困難な事柄にひるまず勉強するうちに、いつか高尚なところを得ることができると。かといつて、学問をひけらかしては嫌みなだけ。何気ない、ふつうに送る日常生活のなかから、俳句のおもしろさを発見することがだいじなのです。芭蕉俳諧の真髓は、この境地にこそあります。

(藤田真一「俳句のきた道 芭蕉・蕪村・一茶」(一部改変)による)

〔注〕

其角——芭蕉の弟子。

巴風——其角の弟子。

去来——芭蕉の弟子。

「有明の花に乗り込む」——夜明けに花の下で乗り込む。

「月毛馬」「葦毛馬」——どちらも白みがかった毛色の馬。

「卯の花に月毛の馬のよ明かな」

——白く咲き乱れる卯の花の中、月毛の馬に乗って旅立つ、さわやかな初夏の明け方だなあ。

諸説紛々——いろいろな意見やうわさが入り乱れているさま。

「師の風雅に、……この二つに究り、その本一なり」

——芭蕉先生の風流についての教えには、ずっと変わらないうことと常に変化することの二つがある。この二つをつきつめると、その根本は一つである。

伊賀上野——いまの三重県伊賀市。

藩士——大名に仕える武士。

真髓——ものごとの本質。

〔問題1〕 短歌や俳句をくり返し唱えたり、思いうかべたりすること

には、どのような効果があると述べられているでしょうか。

文章1・文章2 で挙げられている例を一つずつ探し、

解答らんにあうように書きなさい。

〔問題2〕

「余韻」とか「想像力」といった考えとありますが、

文章1 の筆者は、短歌を読んでどのような情景を想像しているでしょうか。連続する二文を探しなさい。ただし、一文めの最初の四字と、二文めの終わりの四字をそれぞれ書くこと。

〔問題3〕

あなたは、これからの学校生活で仲間と過ごしていく上で、言葉をどのように使っていきたいですか。今のあなたの考えを四百字以上四百四十文字以内で書きなさい。ただし、次の条件と下の「きまり」にしたがうこと。

条件

① 文章1・文章2 の筆者の、短歌・俳句に対する考え

方のいづれかにふれること。

② 適切に段落分けをして書くこと。

〔きまり〕

○ 題名は書きません。

○ 最初の行から書き始めます。

○ 各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○ 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。

○ 、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号

が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じように書きます（ますの下に書いてもかまいません）。

○ 。と」が続く場合は、同じますに書いてもかまいません。

この場合、「。」で一字と数えます。

○ 段落をかえたときの残りのますは、字数として数えます。

○ 最後の段落の残りのますは、字数として数えません。